

日本語のフォリナー・トークに関する —考察—

—非母語話者日本語教師の意識調査を通して—

辛 銀眞

要 旨

本研究は、接触場面における言語調整行動研究の一部として、日本国内の現職非母語話者日本語教師を調査協力者とし、質問紙調査およびインタビューを行ったものである。本稿は、日本国内における接触場面の複雑化・多様化の一例として、国内の非母語話者日本語教師を取り上げ、接触場面の中でFT (Foreigner Talk; 以下 FT) という調整行動を、会話参加者がどのように考え、受容していくのかを明らかにする。また、現在「多文化共生」という枠組みの日本語教育現場で非母語話者である研究協力者が同じく非母語話者である学習者を相手に用いるFT的話し方の存在を明らかにし、FTを、「接触場面の会話参加者双方が使用可能な調整行動」「多文化社会における言語ストラテジーの一つ」として新たに定義する。最後に、現場で接触場面会話およびFTがどのように扱われているのかを協力者の学習・教授体験から検証し、日本語学習者がFTという調整行動を習得する意味を考察する。

キーワード

フォリナー・トーク・非母語話者日本語教師・接触場面・調整行動・共生日本語

1. はじめに

新世代の日本語教育を目指して、多文化共生、共生日本語ということばが接触場面研究のキーワードにもなって久しい。しかし、その流れの中で、日本語のフォリナー・トーク (Foreigner Talk; 以下 FT) は、非母語話者の学習や習得を促進させるという、従来の「お役たちツール」的評価から一転し、日本語母語話者と非母語話者の共存を脅かす「差別」的なもの、非母語話者の学習や習得に結びつかず、むしろ日本語母語話者に対する「ネガティブな反応」を導き出すものとされている。また、長い間、接触場面の研究対象とされながらも、その研究内容の多くがFTの類型化に留まっているため、未だ日本語使用場面における特徴は十分に究明されていない。更に、従来のFT研究は、日本語母語話者の視点に偏重したものが主であり、会話参加者の社会性および談話の双方性に基づく研究は少

なく、その定義も“日本語母語話者の、非母語話者に対する修正された言い方”と固定概念化している。

しかし、日本国内で、日ごと多彩になり、数も著しく増えていく非母語話者の存在、また、多様化していく日本語学習者の問題、そして「共生日本語」を掲げた日本語教育の枠組みの転換（たとえば、学校型から社会型・地域型日本語教育への転換）の中で、現在、日本語話者の増大・細分化に伴う接触場面の多様化とそれに起因する複雑なインターアクション問題を解明するためには、FTの新たなパラダイムを模索する必要がある。

著者は、言語の種類・文化圏・人種などに関わらず、主な使用言語の既習・既得者である話者が、習得途中の話者に対して様々な「調整」を用いてコミュニケーションを行うことは、普遍的な現象であることを認める。しかし、その上で、その会話が接触場面会話か否かに関わらず、行われたコミュニケーションの円滑さを判断すべき話者（会話参加者）は「言われた側」であると考え。そして、日本国内の日本語環境が「多文化多言語共生」に変わりつつある「今」だからこそ、改めて接触場面のFTを再考し、その会話の背景にある会話参加者の意識を探る必要があると考える。

そこで、本研究は、日本国内における接触場面の複雑化・多様化の一例として、国内の現職非母語話者日本語教師15人¹⁾を調査協力者とした質問紙調査およびインタビューから、FTという言語現象を会話参加者がどのように考え、感じ、受け止めたかを明らかにする。また、現在、「正しい日本語」から「私らしい日本語」へ移行しつつある日本語教育の現場で、非母語話者日本語教師が非母語話者である学習者を相手に用いるFT的話し方の存在を明らかにし、FTを、「日本語母語話者の、非母語話者に対する修正された言い方」ではなく、「接触場面の会話参加者双方が使用可能な調整行動、多文化社会における言語ストラテジーの一つ」として新たな定義を行う。

最後に、日本語教育の現場で接触場面会話がどのように扱われているのかを協力者の学習・教授体験から検証し、日本語学習者がFTという調整行動を習得する意味を考察する。

2. 先行研究

フォリナー・トーク（Foreigner Talk；以下FT）は、接触場面における意味交渉の特徴の一つで、会話参加者の片方である母語話者が、非母語話者に対して行う調整行動として知られている。1960年代後半、社会言語学者であるフォーガソン（Ferguson, C.）によってその存在が明らかにされ、以降、「母語話者の、非母語話者に対する修正された言い方」と定義され続けてきた（Ferguson 1971, 1981）。また、談話単位で分析された実証研究はフォリナー・トークディスコース研究（foreigner talk discourse: FTD）と称され（Hatch et al 1978）、その概念の下で、Long（1981）、Krashen（1982）などに代表される第二言語習得（Second Language Acquisition；以下SLA）学者らは、「簡略化」（simplified register）、「理解可能なインプット」としてFTに注目し、第二言語習得への有効性を検証する研究を盛んに行った。

一方、日本語のFTは、スクータリデス（1981）によって初めて確認された。スクータリデスは、オーストラリア在住日本人10名と現地学習者とのインタビュー会話分析から、

日本語の FT には他言語の FT と共通した特徴と日本独自の特徴があることを明らかにした。それは、簡単な文法を使用する、基底構造を変形せずにそのまま表現したため重複の多い文になる、非常に詳しい、少し丁寧すぎると思われる表現が用いられる、日本語では普通省略される一人称代名詞が多用される、というような現象であった。以降、日本国内の第二言語習得分野からも FT の簡略化現象に注目した研究が多く行われ、日本語教育関連研究でも「簡略化されたインプット」「理解可能なインプット」として、非母語話者である日本語学習者の習得への影響を検証する研究が行われた（坂本他 1989、志村 1989）。

また、ロング（1992、1995）は、上記研究を基に社会言語学的な観点から実証研究を行い、日本語母語話者の外国人に対する言語行動の特徴を明らかにした。語彙面、文法面、音声面、談話面の 4 つで構成された「対外国人言語行動」は、90 年代以降の FT 研究に大きな影響を及ぼし、FT の特徴や分類を言及する際の基準となっている（村上 1996、オストハイダ 1999、小林 2000 など）。その中で、特にオストハイダ（1999）は、日本語母語話者の「対外国人言語行動」は、聞き手である非母語話者の言語能力に関わらず人種や国籍など「言語外的条件」によることが多いことを実証研究から明らかにし、日本語の接触場面における FT の出現条件が英語母語話者のそれとは必ずしも一致しないことを指摘した。この研究によって、FT 使用という言語現象の普遍性の中に社会・文化的背景による個性があることが改めて認識された。

近年の接触場面研究が、社会心理学的観点を取り入れた適応理論（communication accommodation theory）に基づくもの（一二三 2002、Ross and Shortreed 1990）や、言語管理理論に基づく第三者接触場面研究（Fan 2003）などへと学際的になっていく中で、宮崎（2002）は、接触場面に関する多くの先行研究がストラテジーの類型化を中心作業とし、一部のストラテジーの検証に留まるなど、調整行動の全体像を解明する上で様々な問題点を抱えていると指摘し、研究対象をインターアクション問題全般に広げ、自然な状況下で行われる多様なバリエーションを考慮すべきだと提案している。また、FT に関しては、大平（2001）が、未だ FT という現象が起きる背景やそのメカニズムが明らかにされていないことを言及しており、徳永（2003）も、「日本語のフォリナー・トーク」は研究対象とされながらも、それ自体の特徴の解明が十分には行われてこなかった、と同様のことを述べている。

上記研究は、現在の「多文化共生」環境における日本語話者の増大・細分化と、それに伴う接触場面の多様化を反映する研究が必要であることを改めて強く認識させてくれた。しかし、その多くの中で使用される FT の定義は、“母語話者が使用する調整行動の一つ”として、固定されたままである。

本稿では、日本国内の多様化・複雑化していく接触場面の中で、FT という調整行動を、その言語の既得・既習者だけではなく、会話参加者ならだれもが使える調整行動として捉えなおし、非母語話者・学習者にも使用可能なストラテジーとして改める必要があると考える。そこで、日本語教育の現場から、日本国内の接触場面の会話参加者である非母語話者日本語教師の FT（FT の話し方）を取り上げ、検証・考察を行った。

3. 調査概要

本研究は、2006年12月13日から2007年1月24日まで、日本語が非母語である現職の日本語教師を研究協力者とし、個別にFTに関する質問紙調査およびインタビューを行ったものである。

3. 1. 調査目的

本調査の目的は、接触場面の多様化・複雑化の中で、従来のFTの定義を新たに捉え直し、学習者がFTという調整行動を習得する意味を再考することである。そのために、日本語学習・習得過程においてはFTの被使用経験者であり、現在の日本語使用・教授活動においては他の非母語話者に対するFT的話し方の使用経験者である、国内の非母語話者日本語教師を研究協力者とし、質問紙調査およびインタビューを行った。

3. 2. 調査協力者

本研究の調査協力者である非母語話者日本語教師は、2006年度秋学期現在、早稲田大学日本語教育研究センターに在籍する15人である²⁾。

本調査前のフェイス・シート(3.3参照)から、国籍は、韓国が8人、中国が5人、台湾が2人で、平均年齢は31歳(27歳～39歳)であることが分かった。また、2006年12月現在、日本滞在歴は平均6.5年(最短4年～最長10年)で、日本語学習歴は平均12年(最短7年～最長16年)であった。一方、日本語教授歴は、母国での教授歴を含めて平均3.5年(最短0.5年～最長10年)であるが、日本国内で教鞭を執るのは男性教師1人を除いて、14人全員、早稲田大学が初めてであると答えている。加えて、資格保持に関しては、日本語教育能力検定の保持者が3人で、その他、漢字検定・日本語実用検定・ビジネス日本語能力検定・母国での教員免許などを所持していた。

また、現在、調査協力者の主な使用言語は日本語であり、母語は母国への連絡や親しい友人との私的な会話以外、用いられないことが分かった(特に、勤務先では、授業の引き継ぎ・ミーティングなどの際に、同じ母語を有する者同士の会話においても日本語が使用されている)。

3. 3. 調査資料

本研究の調査資料は、以下の通りである。

- (1) 研究承諾書・調査依頼書
- (2) インストラクション・シート
- (3) フェイス・シート：3枚、1部
- (4) 質問紙(FTアンケート)：12枚、1部
- (5) フォローアップ・アンケート：1部

なお、インタビューは、質問紙調査の後、早稲田大学日本語教育研究科所有の防音室を使用し、個別に行った。また、インタビュー会話は全て協力者の同意下、ICレコーダを用いて録音した。

4. 結果および考察

以下に示す、本研究に用いた質問紙は、2部構成となっている。パート1は、会話例を読んで、会話の自然さや感想などを答えるものである。パート2は、協力者のFTに関する知識・認識・経験有無などを問うものである。また、インタビューは、具体的にFTに関する知識や考え、学習・教授におけるFTの個人経験を語ってもらったものである。

4. 1. パート1：FT 会話例に対する返答から

調査協力者には、まず、接触場面会話「教科書」の会話例を用いて教授・学習される場合を想定し、以下の図1のような、音声情報を省いたA4用紙2頁分量の文字化資料（会話開始時から約2分間の文字化資料；ライン数で計64行）を提供し、教科書の会話例を読む感覚で読んでくれるように指示した。その際、読むスピード、回数、時間、書き込みなどは、全て自由とした。

● 次の会話例を読んで教えてください。

話者は、二人とも20代で、「初対面」です。BF1は日本人女性、WFは西洋人女性です。

BF1	こんにちは。
WF	こんにちは。
BF1	はじめまして 〈笑い〉 ふふ。
BF1	えっと、どこのお出身の方ですか？
WF	えーと、ブルガリアです。
BF1	ブルガリアですか？
WF	はい。

図1 質問紙調査パート1：会話例の一部

今回用いた会話例は、辛（2005）の会話資料の一部で、従来の研究で日本語の「FTの特徴」とされている、「簡略化」や「理解可能なインプット」、例えば、繰り返しや言い換え、確認、敬語の省略などは、全く使用されていない。従って、一見、自然な会話に見えるが、母語話者の一方的な話題提示・質問が続く不自然な会話で、辛（2005）では「FT的会話パターン」とされたものである。本研究では、この会話例を用いて、協力者側が有するFTの定義・範疇について確認を行い、後のインタビューではFTに対する視点を再考する刺激剤として以下の回答を使用した。

まず、会話例を読んだ直後の、会話の自然さを問う最初の質問に、協力者15人中12人が、5段階評価で「自然な会話である」と答えている。しかし、次の設問で、非母語話者（Non-native-speaker；以下NNS）側が、「なぜ日本人は同じ質問ばかりするのか分からない、不愉快」と答えたことが提示されると、協力者側は、「自然な会話として読んだのに、二人の感想が違うことが分かって驚いた」「私もしょっちゅう経験するのでこのNNSと似たようなことを思ったことがある」と感想を述べている。しかし、大半は、「初対面だ

から仕方がない」「日本人としては自然」「外国人相手でありがち」「私もよくされるけど、今は気にしない」と記入している。

以上の結果から、本研究の協力者は、FTの定義・範疇を、従来の「FTの特徴」に限定したものとして捉えていることが分かった。また、協力者は全員、「FTが使われたことがある」と答えていることからFTの被使用経験者であるが、長い日本滞在歴・学習歴およびNSとの接触経験により初対面の日本語母語話者（Native-speaker；以下NS）の対外国人言語行動に柔軟に対応できる調整能力を持ったことで、FT的話し方も受容していることが明らかになった。

4. 2. パート2：FTに関する知識・認識から

まず、協力者側のFT知識有無を問う、「FTということばを知っているか」という最初の質問に、全員「はい」と答えているので、そこから更にFTに対するイメージを問い、評価を分けてみた（以下、「」は質問紙の選択肢；項目は複数選択可能）。なお、以下の評価は、協力者側が相手話者との関係をどのように捉えるかに起因する。

- (1) ±0 評価（ニュートラル） 「日本人の、外国人に対する日本語」：15人
「外国人の日本語」：0人
- (2) + 評価（ポジティブ） 「相手にわかりやすい話し方」：13人
「話す人の配慮・気配り」：8人
「話す人の親切」：0人
- (3) - 評価（ネガティブ） 「変な日本語」：5人
「簡単な単語使用」：14人
「差別」：0人

上記の結果から、本研究の協力者は従来のFTの定義に充実であることが再確認された。また、FTに対する評価は、ポジティブとネガティブが半々で、極端な評価は避けていることが分かった。

次に、「初対面会話で自分／相手の気になるところ」を問う設問の選択肢として提示されたものは「外見・しぐさ・服装／持ち物・声・性別・日本語使用・日本語の発音・その他」の9点であったが、特に、「自分の気になるところ」として、対NS会話でより強く「日本語の発音」を意識し（15人中11人）、「相手との関係」「身分」「職業」「敬語」なども考慮していることが分かった。また、対NNS会話では、「接し方」「話し方」「相手の日本語を見積もってみる」「自分の日本語を調整」と記入されたことから、本研究の協力者が相手に合わせて日本語を調整していることが分かった。

そして、「FTの使用原因」を問う設問では、「初対面会話だから・外国人は日本語が分からないから・外国人の日本語が下手だから・話をもっと分かりやすくするために・親切的な心から・話す人の癖・特別な意図は無い・その他」という選択肢（複数選択可能）から、協力者15人全員が「話をもっと分かりやすくするために」を選択していて、本研究の協力者は、現在、FTを、相手話者との円滑なコミュニケーションを図る手段の一つとして考えていることが明らかになった。一方、その他に、「外国人とあまり会っていない人はよく使う」「はじめは、日本語のレベルを探るために使う」などの記述があった。

次の、「外国人に対する“日本語上手ですね”は、日本人のほめ言葉である」という設問に対して、「初対面関係で」は、協力者 15 人中 14 人が「いいえ」を選択している。また、15 人全員が、初対面関係で「言われたことがある」と答えている。同じく、「友人・知人関係ではほめ言葉である」に対しても「いいえ」を選択した協力者が 10 人で、言われたときの気持ちとして、「嬉しい」と答えた協力者が 3 人、「お世辞」が 6 人、「非常に不愉快」が 2 人、「(今は) 特に何も」が 13 人であった。

一方、「NNS との会話における日本語使用」に関しては、15 人全員が「担当授業以外にも日本語を用いる」と答えていて、その際、「日本語を調整する (FT を使用した経験がある)」と答えている。また、その理由として、「話をもっと分かりやすくするために」を選択したのが 14 人、「相手の外国人が、日本語が分からないから」が 5 人、「相手の外国人の日本語が下手だから」が 14 人であった (複数選択可能項目)。しかし、本研究の協力者側に、非母語話者である彼らが同じく非母語話者である会話相手に対して FT を使用している、という認識は無かった。

また、同国人との会話を含めて、「外国人と日本語を用いて話すとき、ご本人の日本語教授経験が影響を及ぼしていると思いますか」「FT を使用したことがありますか」という質問に、協力者は全員「はい」を選択していて、現職教師としての教授経験と FT 使用には強い相関があることが分かった。また、会話時における FT の使用理由を、「担当授業では使用せざるを得ない」「理解を促すために仕方なく使う」「分かりやすくするため」「学生のレベルに合わせて話してしまう」と述べていることから、本研究の協力者側は、教室内で用いるティーチャー・トーク (Teacher Talk; 以下 TT) を FT として捉えていることが分かった。これは、「現在の FT に対する考え」を問う最後の質問で、協力者 15 人の内 13 人が「よくない: ネガティブ」を選択しているが、同時に「仕方がない」「授業運営のため使わざるを得ない」「本当はよくないけど、使う」などの記述を加えていたことから明らかである。

以上、質問紙調査パート 2 の結果から、本研究の調査協力者は、従来の FT の定義に充実で、NS の NNS に対する調整のみを FT と捉えていることが確認された。また、実際、対 NNS 会話で自ら FT 的な話し方を用いているのにもかかわらず、FT は本来使ってはいけないネガティブなものであり、教室場面では (教師として) 仕方なく使わざるを得ないもの、と答えていることが分かった。この結果から、本研究の協力者である非母語話者日本語教師は、対 NNS 会話の際に、同じ「外国人」「NNS」「学習者」という立場ではなく、「日本語教師」という立場を強く認識し、会話する傾向があるのではないかと推測される。

4. 3. 半構造化インタビュー: FT の個人経験から

インタビューは、開始前に、大まかな流れを提示したインストラクションを読ませた後、半構造化インタビュー法を用いて、早稲田大学大学院日本語教育研究科所有の防音室 (録音室) で、研究者と対面する形で行った。なお、質問の際、仮説として、本研究の協力者である非母語話者日本語教師の日本語学習・習得過程から現在の言語行動に至るまでの調整行動を以下のような段階で想定し、また、FT 経験とそれに伴う反応・認識の相関から、各段階の調整行動をポジティブ・ゼロ・ネガティブに方向付けした。

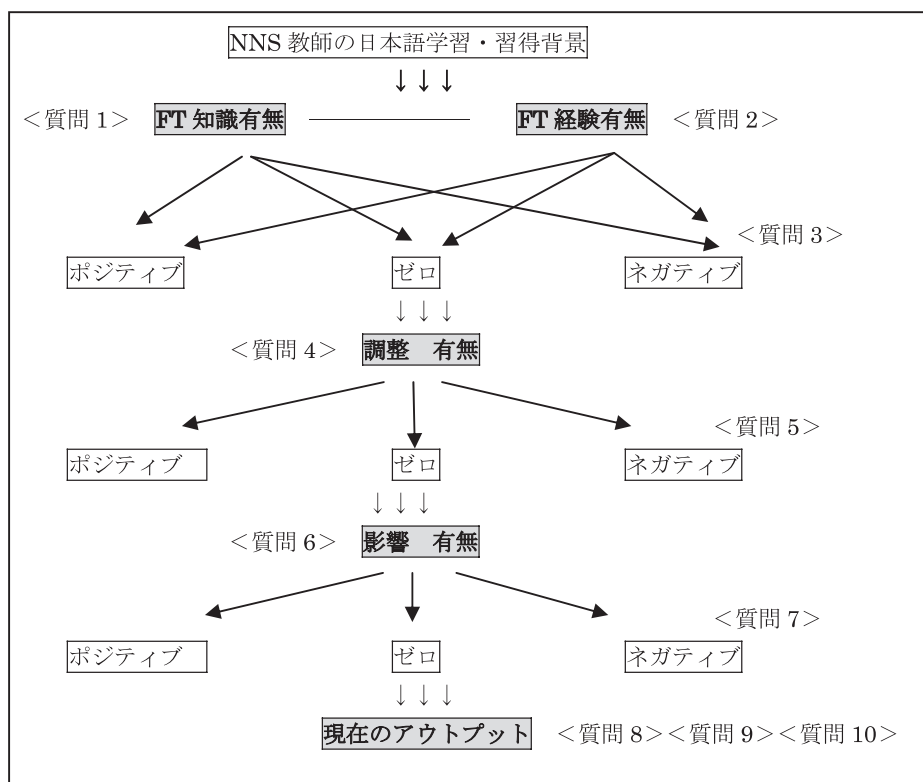


図2 インタビュー質問の流れ

まず、最初の、「FT を、いつ、どのように知ったか」という質問には、協力者全員が、来日後、大学の講義などから初めてその定義を学んだ、と答えている。それ以前の学習過程で、接触した日本語母語話者に FT を使われたり、会話授業などで NS 教師に TT を使用された経験はあるが、それが FT であるという認識はなかった。また、「学習初期に FT を知っていたら、今の日本語使用に変化があったと思うか」という質問に対しては、2 人を除いて、「もし事前に教わっていたら、NS との会話で常に FT 使用有無を気にしていたかもしれない」「言葉の定義は分からなくても、経験から学んだから、影響はないと思う」「母国の授業で、NS 教師に常に FT を話されたが、わかりやすかったのでありがたかった」などと話していて、**FT 知識有無**とそれ以降の調整行動との相関は明らかにされなかった。

一方、**FT の被使用経験**については、全員が「ある」と答えているが、それは、主に「初級段階で」「日本語学校の先生から」「授業で」経験したことであり、「今はほとんど使われない」と答えている。特に、来日直後は、「バイト先で使われ、悲しい思いをしました。ウツになるくらい」「道を聞いたら思いっきり FT で返してきた」「ど忘れして、NS の友人に言葉の意味を聞いたら、あまりにも丁寧に答えてくれて…」などとネガティブな経験談を述べているが、全て、現在の経験ではないことが強調された。しかし、一方で、入管・区役所などでは、「それは、もう…」「経験しない人、いないんじゃないですか」などと笑い混じりに答え、日本で生活していく中で、「引越し関連で電話したら、名前を告げた途

端、相手の反応が変わって、FTになって」「(初対面会話で) 自己紹介したら、相手の話し方がおかしくなって…」と経験を語っている。そこで、FTを使用されたときの調整(気持ち・相手への反応: 図2<質問3>および<質問4>)は、協力者の学習時期や日本語使用場面、会話相手との関係性によって、ポジティブかネガティブかに調整が二分されることが分かった。

また、**FTの被使用経験からの影響**(質問6)として、「日本語・日本人に対する認識の変化」について質問した結果、協力者個人の体験によって、調整方向も異なっていたことが分かった。例えば、「日本人がいやになったときがある。毎日泣いていた」「(自分の) 日本語がまだ駄目だと思い、落ち込んだ」のようなネガティブな受容、「話し方のひとつだと思う」「日本人の問題ではなくて、その人の問題なので」のようなポジティブ受容が一部報告された反面、大多数である11人は、「特に何も変わっていないと思う」「初期にはそれに気が付かず、今になっては使われないことがないので、別に(笑い)」「どんな国でも、あるでしょう?」などと話している。また、その後の変化(相手に対する調整有無)についても同じく個差があり、「(ことごとく訂正され、FTを使われたので) 何も話さなくなった」というネガティブな調整、「がんばって言い負かそうとした」「敬語に気を使って、丁寧に返すようにした」というポジティブな調整は3例だけで、11人が「あまり変わらない」「(自分の変化が) よくわからない」とゼロ調整を示している。

以上の結果から、**FT経験**(質問2)から**調整有無**(質問4)および**影響有無**(質問6)に至るまでは、非母語話者日本語教師の個人経験によって調整方向も異なり、また、その体験の影響からそれ以降のストラテジーの選択が行われていることが分かった。そして、本研究の協力者側は、現在、NSからFT的な話し方をされた場合でも柔軟に対処できる言語能力を持っているため、FTに対しても学習初期段階のような過敏さはなくなり、自分らしいスタイルで会話目的、相手、場面などに合わせ、調整行動を行っていることが明らかになった。

一方、**現在のアウトプット**への検証として、**担当授業への影響**に関して質問した結果、全員が「影響はない」と答えている中、協力者2人が「できるだけ(FTを使わず)、自然に話そうとしている」「調整はしない」と自然な話し方を支持し、1人が「直説法で教えているので、使うしかない」と、FTは不可欠だと感想を述べている。そして、残り10人は「(FTを使っただけではいけないと思いながらも) 使ってしまう」「初級では、理解を促すために、仕方がない」などと、FTは“必要悪”であると話していた。

次に、日本語教育の現場で接触場面会話がどのように扱われているのかを協力者の学習・教授体験から検証し、日本語学習者がFTという調整行動を習得する意味を考察するため、質問8として、現在、教室場面で接触場面の会話をどのように扱うべきかを問い、FTを学習者に教えるべきか、と質問した。それに対して、15人中13人の協力者が、「教える必要はない」と答え、その理由を以下のように述べている。「専門家でもないのに、要らない」「学習者が(FTを知ったら) ネガティブになってしまうかもしれない」「自然に分かるようになるから、教室で教える必要はないと思います」「(早稲田に来ている) 学習者も様々な言語を学んできているので、教えなくても、分かっていると思う」。一方、教える必要があると答えた2人は、「より賢い対応ができると思うから」「自分でいろいろ

話せるようになるでしょう。FTされたとき、どうすればいいのか、いろいろ分かっていたほうが使えるし。自分はそれができず、不愉快なのに、いつも黙っていたから、教えてあげたい」と答えている。

しかし、「教える必要はない」と答えた協力者も、教室活動の一環として、接触場面会話やFTを取り入れることには賛成している（15人中10人）。また、その理由として、「会話など、補助的な活動として紹介してもいいと思う」「若者言葉とかと同じように、日本にはこんなものがあるんだよ、くらいで」「初級学習者が馬鹿にされないためにも」としている。しかし、一方、反対意見としては、「間違った日本語を教えてどうするんですか」「それだとキリがない。渋谷の言葉や流行語なども全部教えろ、ということになる」「今の教科書だけで十分」「はじめは、正しいルールを身につける必要がある」などの指摘があった。

また、更に、FTを教科書に載せるべきか、という質問に対しては、協力者15人中13人が反対で、上記の「教える必要はない」という意見と共に「基本が大事」「ありえない」「なぜ載せるんですか?」「載せるほうがいい、という研究ですか?」のような反応が返ってきた。少数派である賛成意見としては、「学生のため、ぜひ。でも、工夫が必要ですね」「それ自体は問題ないと思うけど、どうやって教えるのかな…」などがあつた。

そして、仮にFTという情報を学習者に提供する場合、学習のどの段階がいいのか、という質問に対して、「学習の初期段階で」と答えた人が3人、「中級以降で」が3人、「提供しない」が9人であった。それぞれの理由として、学習初期段階のほうでは、「はじめから知っといたほうが、学生は楽」「日本で生活するんだったら、知っておいて損はない」「(教室の)外に出れば、どうせ使われるんだから」という返答があつた。また、中級以降という意見では、「いろいろ経験し、わかってから学んだほうがいい」「先ずは、文法が定着できてから」「(中上級じゃないと)会話例など見ても混乱するでしょう。違いなどが分かって、使えるようになるのは」という説明があつた。最後に、「提供しない」という、最も多くの意見としては、「わざわざ教える必要はない」「教えたいんですか?」「話し方の一つなので、日本語の授業で教える必要はない」などがあつた。この結果から、本研究の協力者である非母語話者日本語教師側は、個別の日本語学習体験によってFTという調整行動の捉え方が異なり、情報提供の必要性に関しても、多くが「FTは学習者が各々の学習過程から自然に分かり、学び、なれていくもの」と考えている事が分かった。

一方、質問9の「他の外国人に対してFT的な話し方をしたことがあるか。いつ、どんな状況で話したか」については、協力者15人中13人が、「教授場面でFT（厳密にはTT）を使用している」と答えている。更に、教師がそのような調整を行っていることを、担当授業の学習者に明らかにしているか、と聞いてみた結果、11人が「知らせていない」と答えた。また、その理由を述べる際に、「私は調整しませんから」「学生もそれとなく分かっている」「言う必要がなかった」「理解を助けるためにたまに使うこともあるが、それほどではない」「私たちが聞き取れないから先生がああやっているのかと、学生が余計落ち込んでしまう」「言わなければいけないんですか?」など、ネガティブな反応が得られた。TT使用を開示していた2人は「外に出ると、先生のことばと全然違うって分かるから」「もっと積極的に日本語に接するように、けしかけるため」と話している。また、教室の

外でNNSに対してFT的な話し方を用いたことがあるか、という質問に対しては、13人が、「(以前担当していた) 学生などと出会ったとき」「話を分かりやすくしようとして」「相手の日本語レベルを見積もるために (初対面会話で)」用いたことが「ある」と答えている。残り2人は、「自分の学生ではないので、調整はしない」「使ったことがあるかもしれないが、意識したことはない」と話している。

最後に質問10として、現在、FTに対してどのように考えているか、また、調査協力以前と比べて考えに変化があるか、聞いてみた。一番多かった感想は、「FTの定義が分からなくなった」ということであった。また、「自分が使っていることばが、もしかするとFTかもしれないと思いながらも、仕方なく使っている」「毎日、たくさん使っているので… (笑い)」のような感想も多かった (15人中12人)。本研究の協力者である非母語話者日本語教師の多くは、自らが対NNS会話の際に用いるFT的な話し方と、既存のFTの定義である「日本語母語話者の、非母語話者に対する修正された言い方」との差異に疑問を感じ始めたのである。

5. まとめ・今後の課題

本研究調査で、日本国内の非母語話者日本語教師のFTに対する言語調整行動には、以下のような傾向があることが分かった。

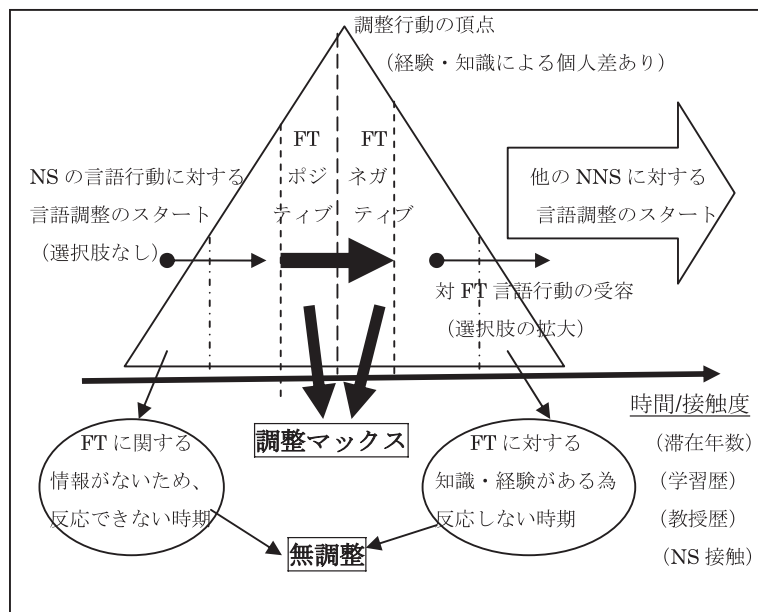


図3 NNS日本語教師のFTに対する言語調整行動

しかし、今回の調査研究では、協力者である日本国内の非母語話者日本語教師のFTに対する意識調査に重点が置かれ、実際場面の会話使用例などを取りあげることができな

かった。今後、引き続き、実証面からのアプローチ、検証を行いたい。

一方、本研究は、日本国内の非母語話者日本語教師を調査協力者としているが、これは、現在、多様化・複雑化している日本語話者・日本語使用環境から従来の「接触場面」および「FT」の定義を再考するためである。著者は、日本語話者を NS 側・NNS 側に単純二分化する従来の接触場面研究の枠組みに異議を唱え、以下の図3のように、実際の会話場面で用いられる日本語の FT 的ディスコースの存在を究明し、FT を、「接触場面のみに関わらず、会話参加者双方が使用可能な調整行動」「多文化社会における言語ストラテジーの一つ」として、新たに捉えなおす必要があると考える。

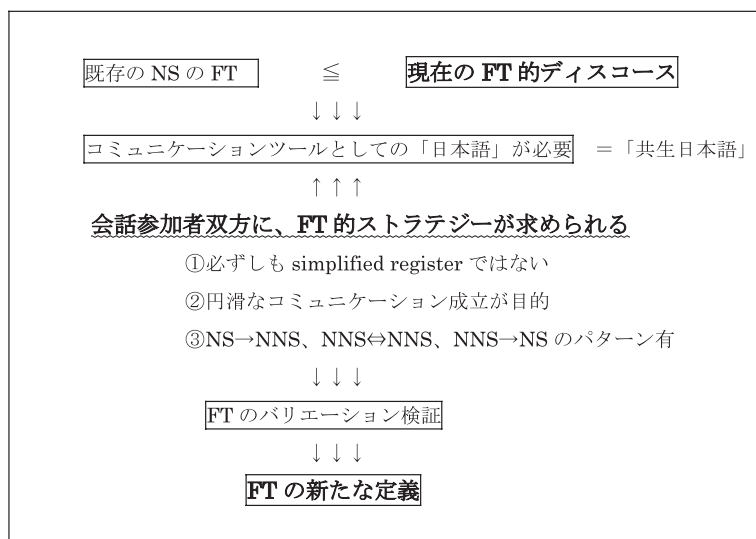


図3 FTの新たな定義に向けて

また、本研究では、「共生日本語」という枠組みの転換の中で、現場で接触場面会話の中の FT という調整行動をどのように考え、扱うべきかを模索したが、協力者である非母語話者日本語教師の学習・教授体験からの検証に留まり、FT という調整行動を習得する意味までは導き出すことができなかった。しかし、本研究の協力者が習得プロセスのある段階から FT を既得したことで、接触場面会話における調整の選択肢がより広がったことは明らかである。今後、日本国内の日本語話者の拡大化、多彩・多様化の中で、接触場面研究は益々重要となり、FT 研究にも新たなパラダイムが求められると思われるので、更に研究を進めていきたい。

注

- 1) 本研究の協力者である現職の非母語話者日本語教師は、語学教師として FT の知識を持ち、日本語学習者としては従来の定義に基づく FT の被使用者である。また、他の非母語話者との接触の際には「FT 的話し方」を用いた使用経験者でもあるので、接触場面における日本語の FT を、会

話参加者双方の立場から再考・検証するためには最適な話者であるとする。

- 2) 非母語話者教師の、女性 14 人は契約講師であり、男性 1 人は客員講師（専任）である。
担当レベルは、初級が 8 名、中級が 4 人、中上級が 4 人である（複数担当あり）。

参考文献

- ファン, S.K. (1998) 「研究会「接触場面と言語管理」」『特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」会議要録』国立国語研究所、pp.1-8
- Fan, S.K. (2003) 「日本語の外来性 (foreignness) : 第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から」『接触場面と日本語教育—ニュースブニーのインパクト』明治書院、pp.3-21
- Ferguson, C. (1971) Absence of copula and the notion of simplicity a study of normal speech, baby talk, foreigner Talk and pidgins. In D. Hymes (ed.) *Pidgenization and Creolization of Languages*. Cambridge University Press. pp.141-150
- (1981) 'Foreigner Talk' as the Name of a Simplified Register. *International Journal of the Sociology of Language* 28. pp.9-18
- Hatch, E., Shapira, R. and Gough, J. (1978) Foreigner talk discourse. *ITL: Review of Applied Linguistics*, 39(40), pp.39-60
- 小林浩明 (2000) 「フォリナー・トーク再考—日本語先行研究における定義を中心に—」『龍谷大学国際センター研究年報』9 号、pp.25-31
- Krashen, S.D. (1982) *Principles and practice in second language acquisition*, Oxford: Pergamon.
- ロング, D. (1992) 「日本語におけるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』vol.11. pp.24-32
- (1995) 「フォリナー・トークに対する意識」『日本語教育における社会言語学的基盤』文部省科学研究費総合 (A) 研究成果報告書、pp.11-24
- Long, M.H. (1983) Native speaker/ non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics* 4. pp.126-141.
- 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、pp.71-89
- 村上かおり (1996) 「日本語における母語話者而非母語話者とのインターアクション—外国人との接触経験とタスクとが母語話者側のインターアクションの仕方に与える影響—」『南山日本語教育』第 3 号、南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻修士課程、pp.26-50
- 大平未央子 (2001) 「フォリナートーク研究の現状と展望」『言語文化研究』27 号、大阪大学言語文化部、大阪大学、pp.335-354
- オストハイダ, テーヤ (1999) 「対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係」『大阪大学日本学報』18 号、大阪大学文学部日本学研究室、pp.89-103
- Ross, S. and Shortreed, I.M. (1990) Japanese foreigner talk: Convergence or divergence?, *Journal of Asian Pacific Communication*, 1-1, pp.135-145
- 坂本正・小塚操・架谷真知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田千恵子 (1989) 「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69 号、pp.121-146
- 辛銀眞 (2005) 「フォリナー・トーク：母語話者の「質問」からの一考察」『社会言語科学会第 15 回大会発表論文集』pp.218-221
- 志村明彦 (1989) 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68、pp.204-215
- スクーターリデス, A. (1981) 「外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45 号、pp.53-62
- 徳永あかね (2003) 「日本語のフォリナー・トーク研究—その来歴と課題—」『第二言語習得・教育の最前線—2003 年度版—』言語文化と日本語教育 2003 年 11 月増刊特集号、凡人社、pp.162-173